

海原の一滴

大 宮 未 来

序章

陽光を通さない深い海の底で、仰向けに寝そべっている。身体は柔らかい砂に埋没し、どこまでが身体で、どこまでが砂なのか分からない。明るいような、暗いような、ぼやけた光が眼前に広がっている。音はなく、時折、水の振動が微かに鼓膜を揺らすだけだ。その空間は例えようもなく居心地がいい。何も考えなくていいのだから。ただ、まどろみの中を漂っているだけ。

しかし急に息が出来なくなる。いや、呼吸の仕方を忘れてしまった、と言ったほうがしっくりくる。自分の心臓の音が聞こえる。どつどつどつ、と不幸の足音のように響いている。苦しくて堪らず、手足で水を掻きながら浮上していく。その手には、指の間に水掻きのような薄い膜が張っていた。

水面に顔を出すころ、いつも夢は覚める。そんな夢を見始めて、もうどれくらい経つだろう。

備後純^{びんじゅん}は赤ん坊がすっぱり入りそうな鞆を担いで家を出た。例年より二週間遅く梅雨が明け、太陽が主役面し始めた今日この頃。一昨日誕生日を迎えて二十三歳になったばかりの彼は、アルバイトで溜めた資金で自分へのプレゼントを買った。日数を決めない一人旅のチケットだ。目的地は女^めノ口^{くちま}島という太平洋に浮かぶ島に決めていた。人口は四百十

二人。面積は一三五五平方キロメートル。香川県より二回りくらい小さい。美しい海と、雄大な自然を売りにしている観光地で、島民のほとんどが漁業従事者だ。道路に信号機は一つもなく、一番大きな建物は木造平屋の小学校。病院はあるが内科のみで、お産をするには船で隣の島まで行く必要がある。住むには辺鄙な島だ。なぜ目的地として女ノ口島を選んだのか。説明するところのことだ。

純は海洋生物学を学ぶ大学院生だ。かつて一緒にヒトデを刻んだり、溶液に漬けたりしていた同級生たちは、次々に水産加工食品の会社などに就職していった。純は忘れ去られたヒトデの切れ端とともに学校に残った。彼の他には、アモンナイトを透かしたような眼鏡をかけた人々が数名、院に上がった。このときから純はコンタクトレンズをやめて、顔の三分の一を覆う黒縁の眼鏡をかけるようになった。

「備後、イメチエンか」

明日から学校が夏季の長期休みに入るという日だった。廊下で彼の肩を叩いたのは、白髪を短く刈り上げた中年男性。四年前から着ているよれよれのポロシャツ姿のこの人は、尾山史生おやまふみおという。純の通う大学の教授で、ゼミなどでも世話になっていた。純が慕う数少ない人物でもあった。

「なかなか似合ってるぞ、その眼鏡」

「このほうが周りに馴染むと思ってる」

「大事なのは目が見えてるか、見えてないか。それだけだ」

尾山は欠けた前歯を曝け出して笑った。純より頭一つ分ほど背が低い。油っぽい頭部が視界に入る。

パタン、パタン。

「先生、俺、夏休みにどっか行こうと思ってるんだけど」

「どこだ。国外か」

「予算的に国内」

「山か、海か、街か」

「どっか」

「随分とアバウトだな」

パタン、パタン。尾山が歩きたび、サンダルのゴム底が床に打ち付けられる。その音が廊下に規則正しく響いていた。わあしが備後くらの歳のとき

尾山の一人称は“わたし”だったが、呂律がうまく回っておらず、“わあし”と聞こえるのだ。

「一人旅に出たっけな。顔見知りがない場所ならどこでも良かったんだが、知人に紹介されて、女ノ口島っていう島に行っただんだ」

「知人って誰だよ」

パタン、パタン、が止んだ。

「当時、塾で講師のアルバイトをしてたな。そのとき一緒に働いてた人に」

そう言った途端、尾山の顔に薄く影がかかった。思わず純は呼びかける。

「先生？」

尾山は無意味に咳払いをしてから数秒の間を置き、天井を仰いだ。

「その島は、良かったぞ。きれいだった。雄大だった。何もないうで、何もかもあった。今でもわあしの記憶に色濃く残ってる。言葉で説明するのは難しいが」

「先生が俺くらの歳のときって、戦国時代？」

「わあしは仙人か。まあ、かれこれ三十年近く前の話だな」

冗談にいつもの調子で応える尾山を見て、純は内心ほっとした。

「その島、今もあるのかな」

「あるに決まってるんだろ。そこそこの観光地だぞ」

「先生が女ノ口島を訪れたのは三十年前の一回だけか」

「そうだ」

「また行こうとは思わないの？」

「そんなことより、女ノ口島ってなんとなくエロい名前だと思わんか」

尾山はいたずらっぽい笑みを浮かべて純を肘で小突いた。純は窓越しの日差しが暑いような気がして、シャツのボタンを一つ外した。

研究室に着いた二人は、パソコンで女ノ口島について調べた。現在ではシーカヤックや、スキューバダイビングなどで有名になっているらしく、高速船での行き方などが詳しく記されていた。

「ここから飛行機で二時間、船で二時間ってとこだな。途中で他の島も経由するみたいだ。わあしが行ったときは移動時間だけで一日かかった覚えがあるが、時代は変わったな」

「先生は泳いで行っただんでしよう」

「伝説に残るわ。語り継がれるレベルだ」

純は丸椅子に跨り、左回りで回転した。本棚に囲まれた研究室をぐるりと眺め、尾山に向き直る。

「俺、その島に行ってみようかな」

「一、二週間行ってくればいいさ。夏休みをヒトデのバラバラ殺人事件に費やすくらいなら、空の星でも見てたほうが
いい」

「ヒトデの細胞補修システムの実験」

「ヒトデって、切られるとき、ちよつと鳴くよな。『キュウ』って」

「そんなこと言われたら実験出来なくなるだろうが」

「備後は存外センチメンタルだな」

「だははっ、と笑いながらゴルフのスウィングをしてみせる尾山。傍から見れば休日のお父さんのようだった。」

旅行用の鞆を担いで家を出た純は、滅多に利用しない路線を駆使して空港へ向かっていた。『お骨になつて帰ってくるなよ』という尾山からの不謹慎なメールを確認してから、携帯電話をポケットに入れる。いつもなら移動時間は流りの曲でも聴いて時間を潰すところだが、今日は音楽プレイヤーを持ってきていない。必要ないと思つたからだ。今の彼に潰す時間はない。ただ惜しみながら過ごす時間しかないのだ。

純は日常が遠退いていく感覚を楽しみながら、ミント味の板ガムを噛む。窓の外には同じくらい突き抜けるような晴天。就職した友人たちのことを考えた。彼らはきつと、学生の特権とも言える長期休みを大層羨ましがるに違いない。

「ごまあみろ」

勝ち誇つたような独り言は、車輪の音に掻き消された。

第一章

純は潮風を受けてべとべとする頬を撫でた。高速船は減速し、乗客たちに着岸のときが近いことをそれとなく知らせた。純の他に乗客は五人。何かの修業のように大きなリュックサックを背負つた男性二人組は、一頻り天気を気にしているようだった。他に五十代くらいの夫婦が、風景の写真を撮るのに夢中になっている。

純と同じく一人で船に乗っている若い男性もいた。健康的に日焼けした肌に、ギリシャ彫刻のような筋肉質な腕。栗色の髪をなびかせ、眩しそうに目を細めている。白いTシャツは先ほど買ったばかりのように真新しく、清潔感に溢れていた。純は景色を見るふりをして青年を観察していた。しかし気配に気付いたのか、青年は伏せていた顔を上げた。そして目が合った純に向つて、まるでそれが自然の摂理かのように話しかける。

「観光ですか」

「厄介なことになつた、と純は心の中で呟いた。もともと人と関わるのは得意ではないのだ。

「僕、女ノ口島の出身で里帰りするところなんです。大学が夏休みなんです」

純は苦笑を唇に挟んで潰す。訊いてないよ、と言う言葉を飲み込んで。

青年は犬のような顔と愛嬌を持ち合わせていた。エナメルの肩掛け鞆に陽光が反射して眩しい。

「学生ですか？」

「ええ、まあ」

「もしかして同い年くらいかな。十九？」

「二十三です」

「浪人したんですか」

「院生です」

「それはそれは。失礼しました」

青年は少しも失礼したとは思っていない顔をしていた。高速船が波止場に到着し、端から聞かせるつもりがないようなノイズだらけのアナウンスが鳴った。早足で立ち去ろうとする純の後を追って、青年が大腿で船を降りた。波止場の岩には、ムラサキイガイが無数にへばりついている。穏やかな波が、それらを撫でるように寄せては返していた。岸には小型の漁船が二艘停泊していた。

純は板ガムをアルミの紙に出して丸めた。磯の匂いがそよ風に乗って、絹のように顔を覆う。

「泊まるところは決まってるんですか？」

青年はよろけて純の右肩にぶつかつた。長いこと船に揺られていたため、平衡感覚を失っているらしい。

「ここまで来て、日帰りではないでしょう」

「これから探すつもりです」

「今の時期は混むから、予約なしで泊まるのは難しいかも。よければ、僕が周旋しましょうか」

余計なお世話だと突っぱねてしまおうかとも思ったが、泊まる場所がないのは困る。いざとなったら野宿も苦にはならない性質だが、一週間以上の滞在を予定していたからそれなりの拠点は必要だった。

「お願いします」

素直に頭を下げる純に、青年は力強く頷いた。勝ち誇ったような顔をしているわけではない。お節介とも思える行動も、純粹な親切心からなるものなののだと思うことにした。

「僕、おおきどむつき大木戸睦月って言います」

「備後純です」

「ピンゴさん？ 珍しい名字ですね」

「よく言われます」

純は一回名乗れば大抵の人にすぐ覚えてもらえた。しかし、相手の記憶には十中八九カタカナ表記でインプットされていた。

「大学院生つてことは、研究旅行とかですかね。この島は一応観光地^{だけ}けど、めちゃくちゃメジャー^{つて}わけではないんです。でも珊瑚とか珍しい魚は多いみたいで。僕はよく分からないんですけど。ほら、子どものときから当たり前^にそういうの見て育ったから」

「いちおう学校では海洋学を」

「やっぱりね」

研究が目的ではない、とは言わなかった。説明するのも面倒だったし、説明するほどの内容でもないと思った。

「僕は国文学を専攻しているんです」

「へえ。意外ですね」

日に焼けた肌と、がっちりとした体つきから、大木戸を勝手にスポーツマン^{と思}い込んでいた。静かに読書をするよりは、外で身体を動かしているほうが似合っている。

細い道が一本、真っ直ぐに伸びていた。寂れた商店街が軒を連ねている。必要最低限の日用品と長期保存が可能な食

品を売っている店。不衛生そうな魚屋。看板がなければ民家と区別がつかない床屋。趣味でやっているような土産屋。インターネットで見た画像との差異があり過ぎて、純は思わず大木戸に訊ねた。

「観光地なんですよ、ね、」

「南側に行くとは海洋公園とかがあつて、もつと観光地らしいんです。こっちは住宅地だから」

商店街から逸れた裏道には、小さな家々が肩を寄せ合うようにして並んでいた。どの家も沿岸部特有の潮風に晒されて、焼き過ぎたウエハースのように錆びついていた。

民宿まで案内する間も、大木戸の他愛もない世間話は尽きない。純は時折短い相槌を打つだけなのだが、大木戸はいかにも楽しそうに話を続ける。大学の寮で飼われている、やたら顔を舐め回すペロと言う犬の話のときなどは、腹を抱えて笑っていた。自然と純の表情も柔らかくなっていく。いちいち反応を要求しない大木戸のそばにいるのは居心地がよかつた。

ペロの話がまだ続いていたころ、純はある人に視線を奪われた。百メートルほど先を一人の女性が防潮堤の縁に沿って歩いていた。大股で進んでみたり、飛び跳ねてみたり。何がそんなに楽しいのか、きゃっきゃつとはしゃぎ、見えない誰かと遊んでいるようだ。純には女性が自分より大分年下に見えていた。しかし実際のところ、彼女の口元には薄っすらと消えない豊麗線ができていた。白いワンピースの裾が風に吹かれて広がっている。それがヨットの帆のようで、風を動力に前進しているみたいだ。髪の毛があらぬ方向に乱れても気にする素振りはない。

「あれ」

純が指差す方向に目をやった大木戸は、小さな声を漏らして合点した。

「真理ちゃんだ。相変わらず元気だな」

大木戸は子どもを前にした保育士のように優しい微笑を浮かべたが、それ以上語ろうとはしなかつた。純も質問はしなかつた。友好的な空気は一瞬にして散り、干渉しないことが暗黙の了解のように二人は押し黙った。大木戸はペロの話もやめてしまった。

しかし、沈黙が苦になる前に二人は目的地へ到着した。年季が入っている木造二階建ての建物の前。看板には白いペンキで『民宿 しんら』と書かれている。正面は曇硝子の引き戸が全開になっており、日に焼けた下駄箱、百合が活けられた花瓶、出土品みたいな焦げ茶のスリッパなどが丸見えた。

「ただいま。お母さん、いるの？」

大木戸はズカズカと建物へ足を踏み入れた。玄関には百合の香りと、醬油を煮詰めた匂いが充満している。奥には台所があるらしく、深緑色ののれんの端が揺れていた。

「あらあら、睦月。おかえりなさい。一緒にいるのはお友達かしら」

姿を現したのは茹で卵のようにふくよかで、つるりとした中年の女性だった。エプロンから大きな尻がはみ出している。にっこりと笑いかけられて、純は反射的に会釈をした。

「友達で、お客さんだよ」

「随分と若いお客さんだこと。ようこそお越しくださいました。去年は惑星の軌道がこの島の上を通るとかで、観察する人が集まったんだけど、今年はあるまり賑やかじゃないの」

純は問い詰めるように大木戸を見たが、彼はにこにここと人が良さそうに笑っただけだった。

「そういうえば、さつき真理ちゃんを見たよ。防潮堤の上つて遊んでた」

「まあ、そうなの。貝殻を拾うつて言つて家を出たのよ。お昼ご飯だから、呼んできてちょうだい。その前にお客さんを部屋に案内してね」

「久し振りに帰つて来たつてのに、息子の扱いが荒いな」

大木戸はわざと肩を竦め、黒々とした廊下を歩きだした。純も慌ててスニーカーを脱いで、スリッパに履き替えた。玄関から真つすく行くと、薄暗く、急な階段があり、それを這うようにして登る。

「実家だなんて、聞いてないですよ」

荷物に引つ張られ、後ろに転げ落ちそうになりながら純は言った。背中しか見えないが、声から推測するに大木戸は

笑っているようだ。

「言いそびれただけですって。でもうちでよかつたって、きつと思いますよ」

慣れた様子で階段を登り終えた大木戸が振り返る。

「この部屋です」

右手に三つ続いた部屋の、真ん中に位置する部屋。左手にはべっこう飴みたいに濁った薄い硝子窓がある。外の様子はよく見えないが、すぐ隣に人家があるのだと分かった。赤ん坊の泣き声がすぐ真横から聞こえてきたからだ。

部屋に入った純は「ああ」と感嘆の声を漏らした。八畳一間の和室。正面の壁には小劇場のスクリーンと同じくらいの窓があり、一面に海原を映し出していた。誘われるように窓辺へ歩み寄る。大木戸は黙って窓を開けた。

窓の横幅は部屋の隅から隅まで、縦幅は天井から膝上までであった。三十センチほど外にせり出している。おもちゃのような低い手摺りが付いていたが、息を吹きかけたら取れてしまいそうなほど錆びついていた。

さざ波が陽光を跳ね返して輝く。果てでは空の青と海の青が静かにぶつかり合っていた。こうして窓の前に佇んでいると、海に抱きかかえられているような錯覚に陥る。

「いい眺めでしょう」

純の視線の先を追いながら、大木戸は得意げに言った。

「すごい、いい」

「ね？　うちでよかつたでしょう」

純は酔ったような顔をして、一度だけ頷いた。

「何日ほど泊まる予定なんですか？」

「実はまだ決めてないんだ」

「素泊まりでいいなら何日でも大丈夫ですよ。でもうちの母親はお人好しだから、たとえ断つたとしても飯の用意をするでしょうね」

「何かあったら遠慮なく言ってください」と言い残し、大木戸は部屋を後にした。純はせり出した窓枠のレールに腰を下ろし、景色に陶酔していた。覗くと下は先程までいた玄関前だった。大木戸が下駄を履いて出て行くのが見える。どうやら真理と呼ばれる女性を迎えに行くようだ。純がいる場所から彼女の姿は見えなかった。純は潮騒に耳を傾けながら、風に揺れる白いワンピースを思い出していた。

昼食には島の食材を使ったおかずとご飯とみそ汁が出た。ご飯とみそ汁はおかわり自由、ポットの麦茶は飲み放題だった。食事は台所と対面式の部屋で、他の宿泊客と共に食べることになっていた。自室で食べても構わないが配膳は自分でしてほしい、とのことだった。

昼食のあと、民宿の女将さんは風呂場やトイレの場所を一通り説明した。トイレも風呂も自宅のものと同じだった。布団の上げ下げは自分でやらなくてはいけない。脱衣所の洗濯機は自由に使っているが、他の客と衣類を取り違えないように、と言われた。民宿での生活は、いわば学生寮のような生活なのだ。

純が女将さんにもらった地図を部屋で眺めていると、潮騒に交じって下駄の音が聞こえてきた。男女の話し声もする。男のほうは大木戸だとすぐに分かった。話し声は民宿の前を通り過ぎ、裏手に向かって移動した。純は廊下に出て、べっこう色の窓の鍵を外した。一度開けたら一生閉まらないような立つけの悪い窓を十センチほど開け、外の様子を見る。狭い庭を挟み、玄関をこちらに向けて家が建っていた。庭の踏み石の上を歩きながら大木戸と、先程見かけた真理と呼ばれる女性が話している。玄関のドアが開き、中から生後二、三カ月ほどの赤ん坊を抱いた女性が出てきた。

「むっちゃん、真理ちゃん、お帰りなさい」

腰の辺りまでありそうな長い髪の毛を一本に束ねた女性は、赤ん坊をあやししながら言った。

「ただいま、姉ちゃん。その子が『ひなの』か」

『『ひめの』よ。まったく、名前を間違えるなんて、ひどいおじちゃんね』

「おじちゃんはよせよな」

今の今まで楽しそうに話をしていた真理は、赤ん坊を見た途端に黙り込んで家の中に入ってしまった。小首を傾げる大木戸に、赤ん坊を抱いた女性は苦笑しながらそつと耳打ちした。そこまで見て純は急に、自分が覗き見をする悪趣味なやつに思えて恥ずかしくなった。

部屋に戻った純は、女将さんに聞いた観光スポットに印を付けてから、夕暮れには少し早い外へ出てみることにした。太平洋に沈む夕日はさぞ美しいことだろう。そんなことを考えながら防波堤に腰を下ろしていると、背後で聞き覚えのある声があった。

「見てるだけじゃなくて、潜つてもいいもんですよ」

振り返る前に大木戸が横に並んで腰を下ろした。

「海パン貸しましょうか」

「持つてきました」

「そうですね。海洋学の研究で来たんですよ」

そう言うつてから大木戸は「敬語じゃなくていいですよ」と付け加えた。

「僕のほうが年下ですし。とはいえ、僕、もうおじさんなんですけどね。姉が四月に出産しまして。今日初めて姪っ子の顔を見たんです」

「後ろは君の家？」

「うん。母親が民宿の台所で作った飯がそのまま我が家の飯になるんです。ほら、いつべんにたくさん作るでしょう？」

「すぐおいしかったですよ」

「ありがとうございます。うちの母親、料理を作るのも食べるのも好きだから。味見で鍋が底尽きそうになるもん」

女将さんの柔らかな丸い体つきを思い出し、純は吹き出した。

「三年前に親父が死んだショックで痩せたつて言うんだけど、どう考えても嘘だよな、あの体型は」

「女将さんは一人で民宿を切り盛りしてるんだね」

「普段なら姉が手伝つてるけど、今はちっちゃいのがいるから休んでるんです。でも部屋数三つの小さな民宿だから、何とかやっていきますよ。それにホテルと違って、秋とかは閉じてますし」

一家の大黒柱もなく、安定した収入もない。それで生活していけるのだろうか。純の心中を読んだかのように大木戸は言う。

「民宿は母親の趣味みたいなもので、その稼ぎで生活してるわけじゃないんです。姉の旦那は学校の先生だから食うには困らないし、僕は無利子の奨学金を借りて大学に行ってるから」

まるで身内でも話すかのように、大木戸は自分のことを話して聞かせた。会ったばかりの人間に内輪のことをべらべら話しているのか。純は戸惑いながらも、真つ直ぐな大木戸の性格が羨ましくもあつた。

「そもそも島暮らしに金はそんなにいららないですよ」

「そんなものなのか」

「そんなものなんです」

暫くのあいだ、二人は取り留めのない話をして過ごした。とは言うものの、ほとんど大木戸が一方的に話をしていて、しかし押し付けることはなく、純が何か言えばそれを拾つてさらに話を広げた。大木戸には自然に会話を続ける才能のようなものがあるように思われた。

そのうち空が赤みを帯びてきた。熟れた果実のような太陽は、一日の終わりを告げる使者だ。

「むっちゃん、ご飯」

突然、後ろから小鳥のような声がして、二人は同時に振り返る。民宿『しんら』の玄関から白いワンピース姿の女性が顔を覗かせていた。真理だ。彼女は純に気づき、もじもじとワンピースの裾を弄つてから「お客さんも、ご飯」と小声で言つて家の中に姿を消した。

「今の人は、妹さん？」

こちらが訊かなくても何でも話す大木戸だが、真理のことになると表情が曇つた。困つたような顔でもあり、悲しそ

うな顔でもあった。

「年は僕より十歳上です。でも、妹みたいなもの。いや、違うかな。説明するのはちよつと難しいんですが、いい子なんで安心してください」

大木戸は立ち上がり、両腕を空に持ち上げて大きく伸びた。肩の関節がぼきりと鳴る。純のほうを向いた彼の顔には、もう影も雲もかかつていなかった。人懐っこそうな屈託のない笑みがあるだけだ。

「旅行、楽しんでくださいね」

夕日の赤が大木戸の血色のいい頬を尚更赤く染め上げていた。純は瞬きするのも堪えてその顔を見つめていた。

(以下略)